

身代わり令嬢の余生は楽しい

〜どうぞやら余命半年のようです〜



ユルゲン

(ユルゲン・ノーム)

魔導士学校の同期で、ノアとともに魔塔に勤務している。学生のころから、ノアをライバル視している。

エドモンド

(エドモンド・マグナス・ティリエ)

ティリエ王国の第二王子。ノアの幼馴染で親友。魔導士学校では同期でもあった。

フィーネ

(フィーネ・ハウゼン)

ハウゼン伯爵家の次女。白金の髪に碧玉の瞳を持ち、ハウゼン家特有の見た目は違った容姿をしている。

「魔力なし」のため、「ハウゼン家の恥」と呼ばれ隠されながら父の仕事の手伝いをしていた。病が進行し、余命半年と宣告されてしまう。

ノア

(ノア・シュタイン)

王族につく公爵家の当主で大陸一の天才魔導士。

綺麗な顔立ちをしているが、額には火傷のあとが残っている。辺境にある自領で魔導の研究にいそんでいたところ、婚約者として送り込まれてきたフィーネと出会う。

デイジー
(デイジー・ハウゼン)

ドノバン
の妻。
フィーネの母親。

ドノバン
(ドノバン・ハウゼン)

ハウゼン伯爵家の当主
でフィーネの父親。
怪しい投資話に手を
出している。

ミュゲ
(ミュゲ・ハウゼン)

ハウゼン伯爵家の長女。
フィーネの姉で、
殿方に人気がある美し
い見た目をしている。

マギー
(マギー・ハウゼン)

ハウゼン伯爵家の三女。
フィーネの妹で、幼い
頃は体が弱かった。



| | | |
|-------|----------------|-----|
| プロローグ | ～ 辺境の領地にて ～ | 006 |
| 第一章 | 大魔導士ノア | 009 |
| 第二章 | ハウゼン家のファイネ | 015 |
| 第三章 | ハウゼン家の縁談 | 040 |
| 第四章 | ファイネ、シユタイン領へ行く | 060 |
| 閑話 | 第二王子エドモンド1 | 086 |
| 第五章 | ファイネのスローライフ | 091 |
| 閑話 | マーサ | 133 |
| 第六章 | 王都、不協和音 | 136 |
| 閑話 | ユルゲン・ノーム1 | 157 |
| 第七章 | ファイネ、王都へ行く | 161 |
| 閑話 | 第二王子エドモンド2 | 184 |
| 第八章 | ファイネ、王都を満喫する | 195 |
| 閑話 | ハウゼン家のミュゲ | 206 |
| 第九章 | 王都の夜 | 212 |
| 閑話 | ユルゲン・ノーム2 | 227 |
| 第十章 | それぞれの思い | 234 |
| 第十一章 | 決着 | 260 |
| エピローグ | ともに歩む未来 | 288 |
| 番外編 | 二人の幸せ | 294 |

プロローグ ー 辺境の領地にて ー

ティリエ王国の若き天才魔導士ノア・シユタイン公爵が王都を去って四か月後――。

彼は辺境にある自領で魔導の研究にいそしんでいた。王家からの報奨金のお陰で、研究施設の設備はほぼ完ぺきとあってよかった。

そして研究に疲れると、彼は領主館の敷地にある実験棟を出て、森林に囲まれた湖のほとりを散歩する。

ここではほとんど人目もないので、仮面をつけたり、フードを目深にかぶったりして顔を隠す必要もない。王都と違い、繕うことなく自由に歩き回れる。

ノアは素肌に風をあび、湖を渡る水気を含んだ空気と新緑の香りを吸い込んだ。

彼は湖の見える庭にしつらえられたガーデンテーブルに腰かけ、眩しげに目を細めて景色を一望する。鏡のような湖面に映る美しい森林と青い空を眺めながら、暖かい日差しの中で食べる昼食は格別だ。

真っ白なクロスが敷かれたテーブルの上には、カモ肉や野菜、卵などが挟まれたサンドイッチやサラダ、スープなどが並んでいる。ノアはとりわけカモ肉が好物で、そればかり食べていた。

すると、ノアの前に影が差し、鈴を転がすような声がある。

「まあ、ノア様、野菜も食べなければいけませんよ」

それと同時に芳しいコーヒーの香りが漂ってきた。

「ノア様の左隣に座ってもいいですか？」

淹れたての熱いコーヒーの入ったカップを差し出すのは、日に透ける白ブラチナブランド金の髪に澄んだ翠玉の瞳を持つ見目麗しい令嬢だ。

その令嬢が向かい側の席ではなく、わざわざノアの横に座る。なぜなら、その席からは湖や森を一望できるからだ。

普通、女性はノアの火傷やけどの痕が残る醜い容貌を忌避するのに、なぜか彼女は醜悪さなどものともせず近づいてくる。そのうえ、豊かな自然以外何もない辺境の地で毎日楽しそうに、幸せだといわんばかりに暮らしている。

初めは、少し風変わりな令嬢だと思った。だが、今は面白い令嬢だと思っている。

彼女はノアが辺境の領に戻った二か月後に単身ここへやって来た。

投資に失敗した貴族家が資金援助欲しさに、婚約者にどうかと娘を押し付けてきたのだ。

いつもなら追いつ返すのだが、彼女には深い事情があり、ノアは仕方なく手元に置いている。

「勝手にどこにでも座ればよいだろう」

ぶっきらぼうにこたえるノアに、彼女は笑いかける。

「ノア様の左半分はとつてもきれいなお顔立ちなので癒やされます」

「お前、失礼な奴だな」

ノアの右半身は顔を含めて焼けただけだ。痕があり、引きつれていて正視に堪えないほど醜かった。左半分だけとはいえ、顔を褒められたのは子供の時以来だ。

「気にしないでください。私、余命半年ですから、気の毒な娘だと思って捨てておいてください」
悪びれもせず、彼女は明るく軽やかに笑い、なんでもないことのように、己の短い余命を口にする。

「まったくあきれた奴だ。なにかというと自分の余命を逆手にとつて」

驚いたことに、この娘は病身であるにもかかわらず、王都から辺境にある公爵領まで、ひと月もかけて馬車でやって来たのだ。追い返したりしたら、弱って帰路で死ぬだろう。

「それはノア様が、お優しいからですよ。だから私のようなものに足元を見られるのです。ああ、そういえば、もう余命半年もないかもしれませんね。ふふふ、この暮らしが穏やかですっかり忘れていましたけれど」

彼女はそう言って、割ったスコーンを口にして、クリームがたっぷりに入った濃く淹れた紅茶をおいしそうに飲む。

「優しくしたら、魔導の研究者などしていないし、成功も収めていない。そもそもお前は婚約者ではなく、俺の実験体だからな」

不愛想にノアが答える。

「はい。その実験体の私は、おいしいアップルパイが食べたいです。アツアツのアップルパイの上にひんやりしたアイスクリームが載っていたら、なおいいです」

「仕方がない。気の毒な奴だから、お前の夢をかなえてやろう」

ノアが頷く。

「嬉しいです。ノア様のそういうところ、大好きです」

そう言って彼女は陽だまりのように明るく笑った。

「なっ！ なにを言っている。アップルパイとアイスクリームごときで」

彼女の笑顔に頬がかつと熱くなり、ノアはぱつとフードで顔を隠して黙り込む。

昼食後、二人はガーデンテーブルに並んで座り、輝く湖面を飽くことなく眺めた。

彼女との間に落ちる沈黙もまったく苦にならない。

——領主館のポーチに捨てられた貴族令嬢は、不思議な女性だった。

第一章 大魔導士ノア

ティリエ王国は大陸で最も魔導技術が発達した国である。

魔導とは魔法と魔法を総称したものだ。

魔法は自身の魔力を源に風や水や火など自然のエネルギーを操るもの。対して魔術とは、方法や理論を学び、魔導具や薬を作り出したり、時には人ならざるものと契約を結んだりするために必要となる技術である。魔法も魔術もアプローチは異なるものの、両方魔力がなければ行使できないも

のだ。魔力は血筋と密接な関係があり、この国ではたいがい王侯貴族に発現するものである。魔力の有り無しが時に彼らの格を決めることになる。たとえば、結婚もそのひとつだ。

ノア・シュタイン公爵は王都マグナスにある王立魔導研究機関、通称魔塔の筆頭魔導士であった。大陸一の大魔導士として彼の名は轟いている。

そして大魔導士ノアは、ティリエ王国第二王子のエドモンド・マグナス・ティリエによって王宮内にあるサロンに呼び出されていた。

二人の周りにはエドモンドの護衛と給仕が控えている。テーブルには熱い茶と焼き菓子が置かれていた。

彼らは、王立魔導学園時代の同期生であり、親しい友人だ。

「ノア、このまま婚約者もいなければ、お前の評判は落ち続けるぞ」

ソファに腰かけたエドモンドは、難しい表情でテーブルを挟んだ向かい側に座るノアを見つめる。「殿下、御心配には及びません。私は少しも気にしていませんから」

フードを目深にかぶったままで、ノアが答える。彼の場合、その醜い容姿から王族の前でも、公式の間でも姿をさらさなくてもいいことになっていた。

「お前が気にしていなくても私が気になる。お前はこの国の魔導研究部門における功労者だ。この国が豊かであるのも、お前の開発した魔導具やポーシヨンのお陰だと言っても過言ではない。それがあることないこと言われているんだぞ。腹が立たないのか？」

「悪い噂を流されるのは今に始まったことではありませんので、気にしていません」

淡々とした口調でノアが答える。

「悪評の元はユルゲンか？」

ユルゲン・ノームも二人と同じ魔導士学校の同期で、ノアとともに魔塔に勤務している。

魔塔は国の唯一の王立魔導研究機関であり、エリート^{エリート}の集団組織だ。

ノアは若くして成功しているため、やっかみも多く、彼の足を引っ張ろうとする輩^{やから}も後を絶たない。

特にユルゲン・ノームは学生のころから、ノアをライバル視していた。

だが、魔術でも魔法でも天才肌のノアには遠く及ばず、魔導学園時代から首席はノア、次席はエドモンド、ユルゲンは常に三番手以下に甘んじ、年々席次を落としていった。

現在魔塔でもユルゲンの上には、常にノアがいる。それが気に入らないのだ。こざかしい真似をして、何かというとなアの足を引っ張ろうと画策している。

「そのようですね。しかし、それよりも私は王都の雑音に閉口しております」

ノアは魔導研究の功勞から、半年ほど前に叙勲して多額の報奨金をもらった。

その直後から、醜い変人天才魔導士のもとに多くの釣書が送り付けられてくるようになった。

最近では、シユタイン家のタウンハウスに年頃の令嬢を連れた貴族が押しかけてくる始末だ。それをすげなく断るせいで、巷でもあることないこと噂され始めている。

「だから、家が釣りがあって魔力の高い娘と、さっさと縁を結んでしまえばよいものを」

エドモンドは常々そう言っているのだが、ノアはいわゆる研究馬鹿で、魔導以外には興味を示さない。

「殿下。そういうわけで、ここでは落ち着いて研究に集中できないので、私は公爵領に帰ります」

ノアの突然の宣言に、エドモンドが驚きに目を見開いた。

「お前、まさか魔塔を辞めて、辺境にこもるつもりか？」

エドモンドはソファからガタリと立ち上がり、テーブルに手をついた。カップに注がれた熱い紅茶が揺れる。

「辞めるつもりはありません。ただ研究拠点を移すだけです」

ノアは落ち着いた口調でなんでもないので話す。

「王都から公爵領まで、片道でひと月にかかるぞ。有事にはどうするつもりだ」

学生のころから変わらぬマイペースなノアに、エドモンドは頭を抱えなくなった。

ノアは若いながらも魔塔の筆頭魔導士だ。彼が魔塔から遠ざかったら、国にとっては大変な損失である。

特に魔塔の運営はエドモンドがけん引し、ノアとともに成功を収めてきた。その彼に今魔塔から去られては困るのだ。

「王家から報奨金をもらってからというもの、娘を連れた貴族が家まで押しかけてきて、落ち着いて研究もできません。もちろん、報奨金をいただいたことには感謝しております。ということでは魔塔と領を行き来する魔法陣による転移装置を作りました。有事の際には飛んでまいりますので、ご安心を」

淡々とノアが語るとんでもない内容にエドモンドは驚愕した。

「何？ 魔法陣による長距離の移動も可能になったということか？」

エドモンドの間に、ノアが軽く首を傾げる。

「可能なのは魔力量の多い者のみです。それに細かな制御も必要になります。私は一度に二、三人は運べると思いますが、それでも使用は一日に二度が限界です。魔力の枯渇を防ぐため、その後、数日、魔法陣は使えなくなります。しかし、魔導の研究に支障はありません」

彼は、きつぱりと言いつつ切った。そこまで言うなら、とエドモンドは半ばあきらめたように息をつく。

「お前が王都でゆっくり研究ができないというのなら、仕方あるまい。なんなら、私が乗り出して、魔塔でのお前の反対勢力をつぶしてやろうか。研究の邪魔をされているのだろう？ それがなくするだけでも働きやすくなる」

エドモンドが半ば本気で言うのを聞いて、ノアが苦笑する。

「お気持ちはあるがたいですが、一筋縄でいく奴らではありません。誰かスケープゴートを出してそれで終わりでしょう。私は研究のために必要とあらば、いつでも魔塔の自分の研究室に出勤します。今まで蓄積してきた膨大な研究データも希少な素材もありますから」

ノアの言葉を受け、エドモンドが深くため息をつく。ノアは希少なアイテムを、魔塔の自分の研究室の棚に厳重に保管している。だから必ず帰ってくることはわかっているが……。

「わかった。しかし、あまりに働きにくいようなら言ってくれ。それから、ノア、本当に誰とも結婚しないつもりか？ このままでは名門公爵家の血が途絶えるぞ」

彼の一族は魔力量が並外れて多く、代々優秀な魔導研究者を輩出している。

「別に家督など、遠縁の親戚にでも譲ればいいでしょう」

ノアは興味なさそうにさらりと言う。

「お前の遠縁は商人をやっているのではないか。だいたい彼らでは圧倒的に魔力量が足りないだろうし、研究者の資質もない。魔力持ちの娘と結婚して血筋を残せ」

エドモンドは真剣な表情で、ノアを説得しようとする。

「王都の屋敷にいて金に目がくらんだ貴族女性やその家族に追いかけられるのはごめんです。それに彼女たちは、そろいもそろって私の顔を見た瞬間悲鳴を上げて逃げ出すか、気絶してしまいます。そのうえ縁談を断れば、悪い噂をばらまかれるし。まったく、いい迷惑です。申し訳ありませんが、結婚する気はありません。まあ、私と本心から結婚したがるような女性もいないでしょう」

心底どうでもいいというような口調でノアが言う。

「いったん領地に戻り気分転換するのもいいかもしれない。そうだな、お前の話を了承する代わりに、今夜は私に付き合ってくれないか？」

エドモンドはいいことを思いついたようににやりと笑う。

「は？」

ノアは気乗りしない様子だ。

「たまには気晴らしもいいだろう？」

彼にもよい出合いがあってもいいはずだと、エドモンドは思っていた。

その数日後、ノアが魔塔を去ったという噂が、まことしやかにささやかれるようになった。

第二章 ハウゼン家のフイーネ

「お父様。私、また夜会に招待されたの。今度は侯爵家の令息よ。だからマダム・フランシルの店のドレスが欲しいの！」

ハウゼン伯爵家の家族そろつての晩餐で、十九歳になる長女ミュゲのおねだりが始まった。マダム・フランシルは王都一のデザイナーで、彼女の作るドレスはどれも美しく斬新で流行の最先端だ。だがそのぶんかなり値が張る。

いつもはミュゲに甘い父ドノバンが珍しく困つたような顔をする。

「ミュゲ、買ってやりたいが、あのデザイナーのドレスはそれこそ一着で小さな屋敷くらい買えそうなほど高い。それに前回の夜会でも、その前の茶会でもドレスを誂えたばかりではないか」

「そうよ。ミュゲ、あなたはドレスをたくさん持っているのだから、少しデザインを変えれば着まわせるでしょう？」

母デイジーが窘めると、ミュゲが眉根を寄せる。

「ハウゼン家の長女である私が、一度着たドレスに二度も袖を通すわけにはいきませんわ」

「お姉様、ずるいです。いつもご自分ばかり新しいドレスを誂えて。お父様、今度は私のドレスを作ってください。お友達のお茶会にお呼ばれしているんです」

マギーもミュゲに負けじとドノバンにおねだりし始める。ハウゼン家の三女である彼女は末っ子

で十四歳。来年、社交界デビューを控えている。

ドノバンは困ったように眉尻を下げつつも、嬉しそうな表情だ。姉妹はよく似ていて、ハウゼン家特有の赤毛とハシバミ色の瞳を持っている。

次女で十八歳になるフィーネは、同じ食卓につきながらもドレスのことで言い合いをする姉妹をうらやましそうな目で見た。

（夜会や、お茶会ってそんなに楽しいものなのかしら……。私は一度も参加したことがないからわからないけれど）

ミュゲやマギーは茶会や夜会のために着飾り、楽しげに馬車に乗って出かけていく。それに引き換え、社交をさせてもらえないフィーネには友達と呼べる者すらいないので、招待状の一つもとどかない。

フィーネが誰からも話しかけられることなく黙々と同じ食卓で食事をしている間も、ミュゲとマギーは夜会や茶会に着ていくドレスの話で言い合いを始め、それを母のデイジーが困り顔で窘めている。

幸せそうな家族団らんを目の前にして疎外感を覚えながら、フィーネはその日も味気のない食事を終えた。

ハウゼン家の人間は皆美しい赤毛にハシバミ色の瞳を持っている。その特徴は、ハウゼン家の赤と呼ばれるほど有名で、一族は代々赤毛で魔力持ちなのだ。父の親戚筋であるデイジーも同じ色合いで、フィーネだけが、ブリチナフロント白ブリチナフロント金に翠玉の瞳をしている。そのせいでおかしな噂を立てられ、父も

母も幼いころから彼女を隠したかった。

だからフィーネは社交界を知らない。

そのうえ、この国の高位貴族は、そのほとんどが魔力持ちであるにもかかわらず、家族の中でフィーネだけが魔力を持たない『魔力なし』の子供だ。ミュゲや長兄のロルフには『ハウゼン家の恥』と呼ばれ、フィーネはハウゼン家の隠された娘となった。

そんなある日、フィーネは食後のお茶もそこそこに、いつもより興奮気味のドノバンに執務室に呼ばれた。そういう時の父はたいていらくでもない儲け話に乗せられていることが多い。フィーネは嫌な予感がした。

「フィーネ、この投資をどう思う？」

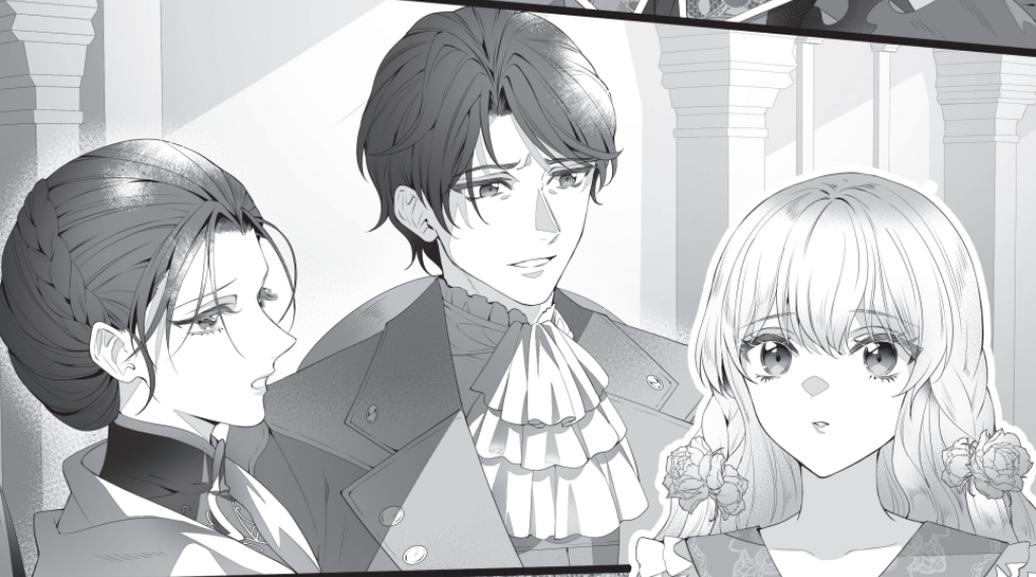
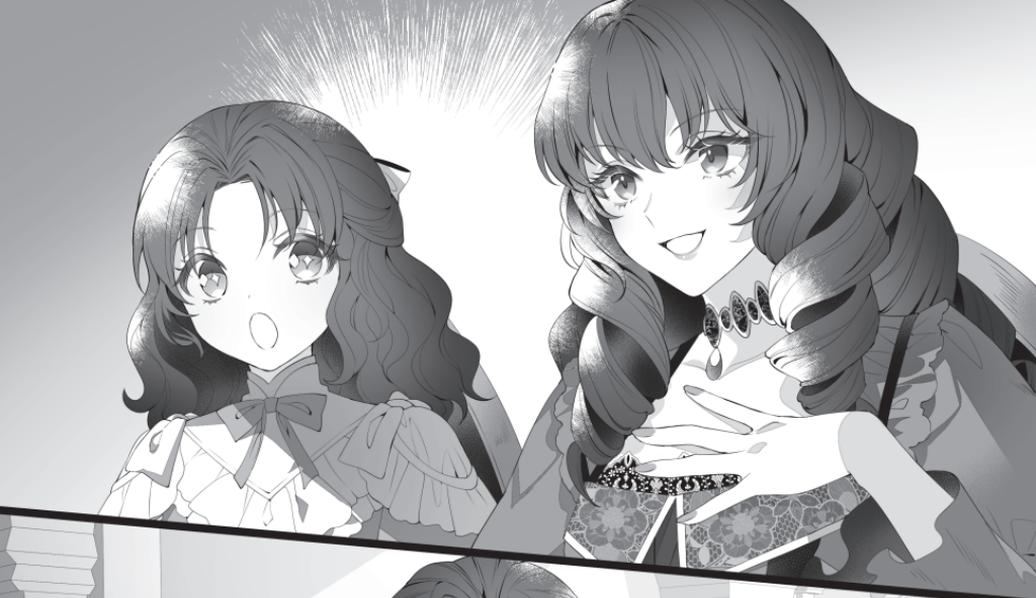
フィーネが執務室に入ると、さっそく父に分厚い書類を渡された。一通り目を通すだけでも時間がかかりそうな投資計画書と契約書にフィーネは早くもうんざりする。

そのうえ、よくよく目を通してみれば契約書には、わざととしか思えないくらい難しい表現が多用されていた。

「お父様、こういう契約書を持ってくる商会は十中八九詐欺だと、私はお祖母様ばあから教わりました」

お祖母様とはドノバンの母のローズのことだ。数字に明るくあらゆる面で頼りになる祖母だったが、四年前に他界している。

「確かに母は数字には強かったし、領で細々と石鹸を売って収益を得ていた。だが、それでは今後



ハウゼン家の発展は見込めない。だから、石鹼の製造販売事業を売ろうと思う」

「そんなことはありません。お祖母様は、王都での販路も見つけ、貴族用に高値で売るために石鹼に色や香りを付けるなど、いろいろと工夫なさっていました。現に収益も少しずつ上がってきています。今この事業を売るのは損です」

実は色付けと香り付けはフィーネの案だった。ローズは彼女のアイデアを否定することなく採用してくれたのだ。そのお陰で王都での販路が開いた。幸い貴族にもハウゼン家の石鹼は評判もよく売り上げは順調に右肩上がりだ。それなのに、父は目先のうまい話に飛びつこうとしている。フィーネはこれから父の説得をしなければならぬのかと思うと、少し憂鬱になった。

そんなおり、フィーネはまだ祖母が生きていたころのことを思い出す。

当時は小さいながらもハウゼン家は領地を持っていて、領地経営はローズが一人で行っていた。

フィーネはマギーが生まれる少し前から、領地に住むローズのもとに預けられていた。表向きは、デ이지の妊娠出産を気遣ったことだが、実際に預けられたのはフィーネだけでミュゲは屋敷に残っていたし、その後も何かにつけ祖母のもとへ送られた。

フィーネはそこでローズから、帳簿の見方や商売の手ほどきを受け、果ては淑女教育などを学ばせてもらったのだ。

そして、体の弱いマギーの具合が悪くなると、フィーネは看病のために王都のタウンハウスに呼び戻されるといふ日々を過ごしていた。

そのことで、ローズはたびたびドノバンにフィーネがかわいそうだ、苦言を呈していたようだ。逆に、ローズはフィーネばかりをかわいがると、ドノバンが怒っていたことを覚えている。

だが四年前、祖母が亡くなると、すぐにドノバンは狭い領地を売り払い、その資金をもとに投資を始めて、失敗した。ハウゼン家にとっては大損害である。それなのに、ドノバンはまた新しい投資話に手を出そうとしていた。

ドノバンは、今は亡き祖母とフィーネが支えて発展させてきた石鹼製造販売の事業を安値で売り飛ばし、博打のような投資に走ろうとしているのだ。なんとしても止めなければとフィーネは思った。

「この鉱山が当たれば、魔石が出るのだぞ？ 魔石は魔導には欠かせない。魔塔が高く買ってくれらることだろう。そうすれば、我が家は莫大な利益を得ることができる」

ドノバンはこの話を持ってきた山師の口車にすっかり乗せられてしまったようだ。

「お父様、そんなうまい話があるわけがないです。それに魔石がそのような南の土地で出るなど聞いたことがありませんし、魔石はクオリティにより値段もだいぶ変わってくるそうです」

フィーネは執務室に広げられた地図で、場所を指し示す。

「どうせ、その知識も石鹼商人の話の小耳に挟んだだけだろう。石鹼屋になにがわかる。だいたい魔力なしのお前に魔石の重要さが理解できているのか？」

そう言われてしまうと、魔力なしのフィーネは弱い。

ティリエ王国は魔導超大国である。

魔導技術が大陸一進歩しているおかげで、どの国からも戦争を仕掛けられることがなく、また他国はこぞってティリエ王国と交流を持ちたがる。

なかでも王立魔導学園は名門で、時々他国の優秀な人材が留学してくることもあった。そんな国にあつて、水晶でも魔石でも魔導具でもなく、石罅を売っていることを恥ずかしいとドノバンは主張する。

ようは代々魔力持ちで古い貴族の家系なのに、石罅の製造販売で生計を立てていることが嫌なのだ。確かに石罅は魔石や寶石などと違い安価なものである。だが、生活必需品であり、収益が安定している事業だということをお父は理解していない。これはローズが存命の間も、ドノバンに再三言い聞かせていた。

だが、ドノバンにしてみれば、魔塔と取引ができるのは大変栄誉なことで、ましてや良質な魔石を売り込むことができれば、ハウゼン家は人々の尊敬を集め、何代にもわたり裕福な生活が送れると考えている。

フィーネとてドノバンが目の色を変えるのもわかるのだが、その分巷ではこの手の詐欺が横行していて危険なのだ。

それに今ドノバンが馬鹿にしている石罅の売り上げが、ハウゼン家の家計の要になっている。この詐欺に引つ掛かれれば、領地のないハウゼン家の収入は途絶え、没落を免れないだろう。フィーネはなんとしてもお父を止めねばならない。

「お父様、確かに私は魔力なしです。しかし、この投資だけは絶対にダメです。それにせつかくお祖母様が残してくださったハウゼン家の事業を、売り渡してまで投資をなさるのはいかがなものかと思えます」

フィーネは魔力なしと言われた悔しさを飲み込んで、ドノバンを説得しようと試みる。この父は

収益の出ていた小さな領地まで、祖母が亡くなった途端勝手に売り飛ばしてしまったのだ。ローズと暮らした懐かしいカントリーハウスを思い出すと悲しくなる。

しかし、ドノバンはテコでも動かないフィーネにため息をついた。

「フィーネ、お前の頑固さには辟易とするよ。そういうところは祖母譲りだ。長く預けすぎたせいか、よくないところが似てしまった」

落胆したように父が言う。大好きなローズを貶されたような気がしてフィーネはカチンときた。

「しかし、お父様は、銀山も水晶発掘も失敗なさったではないですか？」

フィーネの言葉にドノバンは苦り切った顔をする。

「あの時はたまたま運がなかっただけだ。他家も投資に打って出ている。今が勝負時だろう。それのうちには嫡男のロルフが留学しているし、ミュゲのドレスも買ってやらなければならぬ。これからデビューを控えているマギーのドレスも宝飾品も必要だ。家で私を手伝っているだけで、社交も世間も知らないお前に何がわかる」

ドレスの一つも誂えてもらったことのないフィーネは、ぎゅっと唇をかむ。少なくともドノバンよりは帳簿を読めているつもりだ。

「私が、こうしてお父様の手伝いをしているのは、この家に秘書を雇うお金がないからです。その原因はお父様が領地を売り払ったうえ、投資に失敗してしまったからではないですか」

フィーネの言葉は真実で、ドノバンは顔を真っ赤にした。祖母が選んだ優秀な秘書の言うことを聞くどころか、祖母が亡くなった途端臆にしまい、領地を売り払い、無謀な投資に走ったのはかならずドノバンなのだ。

「お前のような小娘に投資や商売の何がわかる！」

そう言つてドノバンはフィーネに背を向ける。拒絶の気持ちひしひしと伝わってくる。父がこうなつてしまふと話し合ひは、もう無理だ。フィーネは今日のところは引くしかない。またやつてしまつたとフィーネは思った。

（相手にしてほしいことがあつたら、相手が受け入れやすいような伝え方をしなくてはだめだとわかつてゐるのに、また遠慮のない言い方をしてしまつたわ）

しかし、この投資を認めるわけにはいかない。なんといえ、父に上手く伝わるのだろうか、フィーネは悩みつつも試行錯誤して活路をみいだそうとしていた。

日々、そんなドノバンとの攻防が続く中、フィーネは徐々に体調を崩していった。

最初は軽いだるさを感じるくらいだった。そこからだんだんと朝、ベッドから起き上がるのも億劫になつてきた。

気鬱のせいかと思つていたが、微熱も続いてゐる。食欲も落ち、体調の悪さから、集中力に欠け、帳簿の数字を追うこともつらくなる。

ドノバンはフィーネの説得のかがあつたのか、最近投資の話をしなくなつたので、ほつとしていたが、逆にフィーネの健康はゆっくりと損なわれていった。

そして、残念なことにドノバンはローズが言つていたように、あまり数字や契約書の類いは得意ではないようで、フィーネがいないと書類仕事も滞りがちだった。彼女が体調を崩して休むと大事な書類をため込んでしまふ。

フィーネは父の補佐をするため、無理をして起き上がる日々が続いた。それを見かねた執事のヘンリーが少しずつ仕事を手伝うようになっていった。

そんなある日、フィーネはとうとう倒れた。しかし、家族は誰も彼女に関心を示さない。フィーネがどれほど骨を折って家族のために仕事をしたとしても、魔力なしで両親に似ていない彼女は、家族から正しく評価されることはなかったのだ。

その後、フィーネは徐々に寝込みがちになっていく。

どうにも体が重くて、最近では湿っぽい咳が出る。

フィーネが部屋で休んでいると、困り顔でヘンリーが彼女の部屋に訪れた。

「お嬢様、実は書類がたまっております。旦那様の手には少々あまるようです。私では判断しかねるものも多くて……」

ドノバンがフィーネの部屋の様子を見に来ることはない。きっと彼女が投資に反対したことで、へそをまげているのだろう。そして、母デイジーはミュゲとマギーの世話と社交に忙しく、フィーネに無関心だ。

屋敷であてがわれたフィーネの部屋は、ほかの兄弟妹きょうだいたいよりも狭く粗末な部屋で、食堂からも執務室からも遠く離れていて不便だった。

「ええ、すぐに支度します」

今ではヘンリーがフィーネの代わりを務め、さらにフィーネの様子まで見に来てくれている。

「お嬢様、医者には掛かってはいかがでしょうか。お食事あまり召し上がっていないようで心配です。」

お嬢様が倒れられたらこの家はどうなってしまうのでしょうか？」

まだ経験が浅く若い執事の顔には、疲労と不安がありありと浮かんでいる。

フィーネも父や母に医者に掛かりたいと言ったのだが、軽い風邪だの、親の注意をひきたいだけだの、仕事をさぼりたい口実だのと言われ、相手にされなかった。

「そうね。そのうち……」

フィーネがこうして休んでいるうちにも重要な書類はどんどんたまっていく。

彼女がふらりと立ち上がると、ヘンリーが気を利かせてメイドを呼んで手伝わせた。今まで何もかも全部一人でできたのに、最近ではそれすらおぼつかなくなってきた。

それでも何とかフィーネは身支度を整え、古い鏡台の前で髪をくしけずっているとまた湿った咳がではじめる。ハンカチで口元を拭くと血が付いていた。

きつとこれはただ事ではないのだろう。フィーネは恐怖を覚えた。

彼女はメイドが持ってきてくれた水差しからグラスに水を注ぎ、口を潤す。こうするとたいいてい咳がおさまる。もしかしたら、自分はもう長くないのかもしれない。そんな嫌な予感にフィーネは一人怯えていた。

フィーネが疲れた体にむち打ち、気力を奮い立たせて立ち上がると、部屋のドアがバタンと開いた。姉のミュゲがノックもせずに入ってきたのだ。

「お姉様、いつもノックをしてくださいと——」

フィーネの言葉はいつものように遮られる。

「ねえ、フィーネ、頼みがあるのだけれど」

ミュゲは頼み事がある時だけ、妹に話しかける。それ以外はいない者のように扱う。

「何でしょう？ いまからお父様のお仕事のお手伝いをしなければならぬのだけれど」

いつも茶会や夜会に飛び回っていると姉と違い、フィーネは家の手伝いで忙しいのだ。

「ああ、あなたは魔力なしだから、仕方ないわよ。良縁に恵まれることもないでしょうし、それぐらい家のためにしないとね」

さらりと言うミュゲの声音には棘が潜み、侮蔑がまじっている。彼女は魔力なしの妹がいることを恥ずかしく思っているのだ。

「それで、何？」

手短に済ませたかった。

「私これから、デートなの」

「はい？」

だから何だというのだろう。ミュゲに貸す服など持っていないので、フィーネは訝しく思い首を傾げた。

「でね、今夜の舞踏会とぶつかってしまったのよ。あなたが代わりに舞踏会の方に出てくれない？ まだ十四歳のマギーに頼むわけにもいかないでしょ」

「そんな……、私は舞踏会に着ていくようなドレスは持っていませんし、お姉様の代わりに出るなんて無理です。それに私は今からお父様のお手伝いがあるの」

フィーネは断った。

ミュゲは殿方に人気があるようで、フィーネが代わりに行ったら皆残念に思うだろう。姉

妹はまったく似ていないのだから。

「あら、大丈夫よ、今日は仮面舞踏会なの」

「仮面舞踏会？」

フィーネは嫌な予感がした。

「そうよ。あなた舞踏会は初めてでしょ？ いい経験じゃない。私のドレスと仮面、それから、か

つらも貸してあげる」

ミュゲは恩着せがましく言う。

「無理です。私は、踊れません」

フィーネはしり込みした。

「あら、ダンスのレッスンは一人前に受けていたじゃない。その成果を披露するチャンスよ？ あなたの場合、もうこんな機会はないかもしれないわ。今日は特別に私の専属のメイドを貸してあげるから、さっさと支度しなさい」

確かにダンスのレッスンは受けたが、ミュゲのおまけとして少し教わっただけで踊れる曲も少なく、今は体調的にもたくさん踊るのは難しい。

しかしフィーネが嫌だと言っても聞くような姉ではなかった。

結局ミュゲのために誂えられたサイズの大きいドレスを着せられ、姉の色である赤毛のかつらをかぶり、仮面をつけて出席することになってしまった。

家の手伝いをしると言っていたドノバンも、二つ返事でミュゲの願いを了承したのだ。ドノバンは魔力持ちで美しいミュゲには甘く、たいていのわがままは聞き届ける。フィーネの話など聞いて

くれたためしがない。

「お嬢様、お氣をつけていつてらっしゃいませ。書類の方はなんとか私がお手伝いします」

ミュゲとドノバンの命令でフィーネが出かけると知って、ポーチまで来たヘンリーは肩を落とし悄然としている。

祖母のローズは、時には使用人たちと食卓を共にすることもあつたのに、王都の家族は使用人に對して高圧的だ。さぞ働きにくいことだろう。そのせいか入れ替わりも激しい。

フィーネはヘンリーに見送られ、ハウゼン家の馬車に乗って出発した。

馬車の車窓から暮れなずむ街を憂鬱な氣分で眺め、姉の願いを断れない自分の立場の弱さのために息をついた。

父はプライドが高く、執事の言うことを聞くような人ではない。ヘンリーでは肩の荷が重いだろう。この間、ふと辞めたいと漏らしていた。ハウゼン家は祖母が他界してから財政も傾き、徐々におかしくなつてきている。フィーネは漠然とした不安を抱いていた。

舞踏会の会場は王都でも有数の富豪の邸宅だ。馬車がポーチに付けられると、舞踏会だというのにフィーネは誰のエスコートもなく一人、馬車から降りる。ふと見上げた空には夜のとばりがあり、赤みを帯びた大きな月が浮かんでいた。

エントランスまで進み、フィーネはどきどきしながらミュゲ宛の招待状を渡した。目元を隠す仮面をつけているせいか、ばれずに入場できてフィーネはほっと胸をなでおろす。

鏡のように磨き上げられた大理石の廊下を歩き、大きな両開きの扉の向こうにある会場に一歩足

を踏み入ると、きらびやかなクリスタルのシャンデリアの下で、楽しげに踊っている大勢の男女の姿が目飛び込んできた。

フィーネは豪奢で賑やかな雰囲気にもまれ、しばし呆然と佇む。すると背後から「その髪色はミュゲかな？」と、男性の声が入り込んで来た。話せば、すぐにばれてしまうだろう。フィーネは慌てて逃げ出した。

シャンデリアの光があまり届かない壁際に移動して、少し落ち着きを取り戻す。

（だから、嫌だったのに……。どのみち私が踊ることなんてないわ）

今は悔しさや悲しさより、ミュゲではないとばれるのが怖くて、化粧室に行つて赤毛のかつらを取つてしまおうかと考えていた。

社交にも出してもらえないハウゼン家の魔力なしの次女だとわかれば、声をかけてきた者たちは、がっかりするだろう。そのうえ、ミュゲの扮装をしているせいで、さげすみの言葉を吐かれるかもしれない。

フィーネが会場の隅で沈んでいると、突然声をかけられた。

「お嬢様、一曲、踊っていただけませんか？」

フィーネは慌てて視線を上げる。

これほど目立たない暗がりなのに、誘われると思っていなかったので、びっくりした。

「あの、私は……」

フィーネは焦りを感じたが、思うように言葉が出ない。

「こういう場は慣れていないのですね？ 私と同じです。しかし、連れがどうしても誰かと一曲踊

れとうるさいので……。無理強いはしません」

困ったように、顔全体を覆う銀色の仮面をつけた男が言う。

「凝った刺繍を施された上等な黒のジュストコールに、シルクのクラブットを身に着けた彼は、所
作も美しく、いかにも育ちがよさそうに見えた。

「私、ダンスは慣れていなくて。あなたの足を踏んでしまうかもしれませんよ？ それでもよろし
ければ」

気後れしながらも、フィーネはありのままを伝えた。

「はい、ぜひ」

意外にも男性は快諾した。

おりしもフィーネが唯一自信のあるワルツが奏でられていた。

「どうか、隅の方で目立たないようにお願いします」

フィーネはそう言って、差し出された男性の手を取った。

「望むところです」

どちらからともなく笑い出す。おかしなところで意気投合してしまった。ふと笑うのは久しぶり
だとフィーネは思い出す。

二人は舞踏場の片隅で、ひっそりとワルツを一曲踊った。曲が終わると彼は優雅に一礼して会場
の雑踏へ消えていく。

仮面の男性は慣れていないと言っていたが、リードがとても上手かったように思う。

フィーネは壁際に戻り、給仕から果実水を受け取り、喉を潤し一息ついた。

「さて、いつ帰ろうかしら……」

華やかな場所は苦手だ。フィーネは、めまいがして壁にもたれかかる。だが、気分は一向によくならないどころか、再び咳が出始めた。ハンカチで口元を押さえると血が付いている。

これはまずい状況だ。こんなところで倒れるわけにはいかない。

フィーネは会場の人混みを抜け、テラスから庭園へとふらふらと出る。噴水のへりに腰かけると少し楽になったので、彼女はここでしばらく休んでから帰ることにした。

「はあ、仮面舞踏会だなんて。お姉様はどうしてこのような騒々しいものが好きなのでしょう。早く帰りたい」

血で赤く染まったハンカチを、フィーネは不安な面持ちでながめる。

(なにか、悪い病気なのかしら?)

きらびやかに明かりのともる舞踏会場では宴もたけなわで、男女の笑いさざめく声や、明るいダンス曲が流れてきた。

薄暗い魔法灯がさす噴水のへりに、一人ぼつんと座っていると、取り残されたような寂しさを覚える。フィーネはみじめな気持ちになった。

その時、後ろの茂みがガサリとなる。何事かとフィーネが振り返ると、二人組の男が立っていた。かろうじて礼装ではあるが着崩していて、だらしない印象。

「やあ、こんなところで一人で何をしているんだい？」

羽根飾りのついた仮面の男がなれなれしく声をかけてきた。

「いえ、別に。もう帰るところです」

フィーネは彼らに警戒心を抱き、まだ少し具合が悪かったが、無理をして立ち上がる。

「ねえ、ここで俺たちと遊ばない？」

もう一人の白い仮面の男も声をかけてくる、息が酒臭い。二人とも酔っ払っているのだ。逃げようとしたその時、羽根飾りをつけた男がいきなり距離をつめ、フィーネの腕をつかむ。

「離してください！」

振り払おうとするが、がっちりつかまれていて振りほどけない。フィーネは恐怖を感じた。

「いいじゃないか、少しくらい」

「せつかくの夜だ。一緒に羽目はずしたっていいだろう？ どうせ仮面で誰だかわからないのだし」

男はフィーネの体を引き寄せようとする。フィーネは手を突っぱり、必死に男を拒んだ。

「おい、嫌がつているだろ。離してやれ」

明るい会場の方角から、一人の男がやって来た。銀色の仮面、先ほど、ダンスを踊った紳士だ。

「なんだ、お前は？」

「俺たちが先に声をかけたんだ」

男たちが気色ばむ。

「どうやらここには招待客だけではなく、ごろつきも混じっていたようだ。だから、こういうおふざけの舞踏会は嫌いなんだ」

吐き捨てるように言った。

「何だと」

かつとなった男たちが殴り掛かろうと、銀の仮面の男に迫る。

だが、その直前で二人の男たちは派手に吹き飛ばされ、したたかに地面にたたきつけられ、二人そろって地面を転がっていく。

フィーネは一瞬何が起こったのかわからなかった。

「もしかして、風魔法？」

これほど強力な魔法を目の当たりにしたのは初めてで、フィーネは目を見張る。

「お嬢さん、大丈夫か？」

銀の仮面の男は、先ほどより砕けた口調で話しかけてきた。こちらが彼の素なのかもしれない。

「は、はい、ありがとうございます。私、もう帰りますので」

フィーネは絡まれた恐ろしさもあり、震えが止まらなかった。

「ああ、その方がいいだろう。ポーチまで送る。家の馬車が待っているのだろうか？」

「いえ、あの大丈夫です」

「いいから、ついておいで。酔客も多くて一人では危険だ」

そう言っただけでフィーネを先導してくれる。

フィーネがふらつくと、怖がらせないように気遣ってか遠慮がちに手を差し出してくれる。親切な人のようで、フィーネの気持ちは少し落ち着いてきた。

彼はフィーネをハウゼン家の馬車の前まで送ると、すぐに踵きびすを返し再び会場へ戻っていった。

馬車が走り出すと、フィーネはほっとする。それと同時に彼の名前を聞き忘れたことを思い出した。

彼はいったい誰なのだろう。

互いに素性も知れない舞踏会で、助けてくれた紳士が少し気になった。

「悪い人もいれば、いい人もいるものね……。でも舞踏会はもうこりこり」

馬車に揺られながら、フィーネは一人呟いた。

仮面舞踏会に行った晩から、フィーネの体調は急激に悪化し、熱と吐き気が続き、ベッドから起き上がれなくなる日が多くなっていく。そんなフィーネのために、ヘンリーがフィーネの世話をするメイドを幾人か選んでくれた。彼女たちは交替でフィーネの看護をするようになった。

そんなある日、フィーネの部屋にいつものようにヘンリーが様子を見てやって来た。彼は使用人を取り仕切るばかりではなく、フィーネの代わりに父の手伝いまでさせられ、疲弊しきっている。

このところ、睡眠不足もたたつてか、フィーネに負けず劣らず顔色も悪く、やつれていた。今にも倒れてしまいそうな様子だ。

「お嬢様、申し訳ありません。私はもう限界です。この度お暇をいただくことになりました」

シヨックだったが、彼の労働状況を考えれば、やむを得ないだろう。残念ながらフィーネには、彼を守るだけの力がない。それがとても悔しかった。

「お父様はなんて？」

「たいそうご立腹で、紹介状もいただけませんでした」

ヘンリーが力なく答える。

「まあ、それではどこの家でも雇ってもらえないではないですか」

フィーネが心配そうにヘンリーを見る。

「いえ、私は故郷に帰ろうかと思えます」

彼は肩を落とすし、首を振る。

「そう。今までありがとうございます。では私が、お父様の代筆で紹介状を書かせていただきます」

「お嬢様……、本当に申し訳ありません」

ヘンリーは目に涙を浮かべ、深々と頭を下げる。フィーネは彼をねぎらった後、ふみ机に座り、さらさらと紹介状を書き始めた。

「今までご苦勞様でした」

そう言つて、ヘンリーに紹介状を手渡す。

「お嬢様こそ、お体、お大事になさってください。ぜひとも医者に診てもらってください。お力になれなくて本当に申し訳ございません」

ヘンリーは何度もフィーネに頭を下げた。皮肉にもこの家で一番フィーネに寄り添ってくれたのは、家族ではなく使用人の彼だった。ヘンリーがいなくなるのは正直心細いが、過重労働のうえ給金もろくに支払えないこの家いつまでも引き留めるわけにはいかない。彼にも生活があるのだから。

「ヘンリー、今までありがとうございます。私に力がなくてごめんなさい」

フィーネは去っていく彼を見送った。

祖母が亡くなり、ドノバンが秘書を職にしてから、上級使用人がどんどんやめていく。今では古

參の上級使用人もいなくなり、残っているのは下女や下男ばかりで、フィーネはハウゼン家の将来が心配でたまらなかつた。

ヘンリーがいなくてはどうにもならないので、フィーネは再び弱る体に鞭打つて父の仕事を手伝い始める。

だが、それもつかの間、症状は進んでいき、再び起き上がれなくなつた。

ひどく胸が苦しくて眠れない夜もあれば、泥のような深い眠りに引きずり込まれ、このまま目覚めないのではと恐怖を感じることもある。

そんな不安な日々を過ごす中で、フィーネは幸せだつたころの夢を見た。

ローズがまだ健在で、フィーネがカントリーハウスに預けられていた七歳ごろの記憶。

屋敷の使用人はローズの意思で、庭師に執事、メイドが三人ほどの最少人数だつた。贅沢をすることはなかつたが、皆でのんびりと静かに暮らしていた。

ローズは貴族女性には珍しく、スフレにパンケーキ、クッキーなど菓子を作ることが趣味で、フィーネもそばで見ているうちに覚え、やがて彼女と一緒に作るようになる。

ローズと一緒に笑顔で味わたつたふわふわのスフレもパンケーキも、たくさん話をしながら食べたバターの風味が豊かなサクサクのクッキーも大切な思い出だ。

領地経営は王都のタウンハウスに住む父ではなく、カントリーハウスに住む祖母がすべて担つていた。

フィーネは祖母が大好きで、いつも働き者の彼女の後をついて回る。

「お祖母様、私には魔力がないけれど、少しでも皆の役に立ちたいの。だから私もお祖母様のお手伝いがしたいわ」

このころのフィーネには、頑張ったら王都の家族にいつかは認められるはずという淡い期待があった。

「そう、なら、帳簿の見方から覚えてみる？」

そんなきっかけから、フィーネは勉強することになった。少しずつ教わってやってみると、収支を合わせるのが面白くて、几帳面なフィーネの性に合っていたようだ。

祖母は感心したようにフィーネを手放して褒め、優しく頭をなでてくれた。祖母の温かくて優しい手の感触が心地よい。フィーネはこれまで両親から頭をなでられた覚えもなく、抱きしめられたこともなかった。

「フィーネは優しく、とても頭のいい子ね。あなたのお父様はあまり数字に強くないから、支えてあげてね。でもね、一番大切なのは、あなたが幸せになることよ」

祖母は優しい笑みを浮かべながらも、真剣な目をしてフィーネを見る。

「私が幸せに？」

まだ幼いフィーネに「幸せ」という言葉は、帳簿に躍る数字より難しく感じた。考えた末、フィーネは答える。

「私は、こうしてお祖母様のもとにいるのが、一番楽しくて、安心で、幸せだわ」

ここにいれば、ミュゲやロルフにいじめられることもない。

祖母は一瞬ハシバミ色の瞳を揺らし、ふわりと温かい笑みを浮かべた。それなのに、なぜか

フィーネにはローズが悲しんでいるように感じられた。

「そう、偶然ね。私もフィーネがここにいてくれることが、一番嬉しいわ。私はフィーネが大好きよ」

ローズが陽だまりのような笑みを浮かべたのを見て、フィーネは安心した。ローズは兄や姉のようにフィーネに意地悪はしないし、父や母のように無関心でもない。いつもきちんとフィーネに向き合ってくれて、「大好き」と言ってくれる。

「うん、私もお祖母様が大好き！」

フィーネはそう言ってぎゅっとローズにしがみついた。祖母からはいつもスフレやパンケーキのような甘い匂いがする。フィーネはその匂いが大好きだ。

「ねえ、フィーネ。もしも理不尽な目にあつたならば、我慢してはだめ。それがたとえ家族がした仕打ちであつても。家族は本来、お互いを思いやり支え合いながら生きていくものなの。それがなければ、たとえ血はつながっていても、家族とは言えないわ」

フィーネは不思議な気持ちで祖母の言葉を聞いた。幼心にも、まるでドノバンやデイジーを非難しているように思える。

「私の母、つまりフィーネにとつての曾祖母は、あなたにそっくりな色合いと容貌をしていて、慈悲深くとても美しい人だった」

「でも私に魔力はないの」

しゅんとフィーネが肩を落とす。

「何を言っているの。あなたはハウゼン家一の賢さと美しさを持つているわ」

フィーネは祖母の言葉に目を瞬いた。

「赤毛ではなくても美しいの？ 醜くはないの？」

びっくりして大きく目を見開いてフィーネが問うと、ローズはフィーネを抱きしめた。

「可哀そうにフィーネ。そんなこと誰が言ったの？ あなたのプラチナブロンドは一族の誇りよ。

エルフ族の血が流れている証拠なのだから」

そう言われてフィーネは一瞬顔を輝かせたが、それもすぐに曇る。

「エルフ族の血を色濃く受け継いだ者は、不思議な魔法を使うとお兄様たちに聞いたわ。私は何もできない。だから私は……」

ミュゲやロルフが、曾祖母は直接精霊に話しかけて従わせることができたと言っていた。

「フィーネ、大丈夫。あなたにもきつと力がある。何より今のあなたには人を幸せにする不思議な力があるわ」

「人を幸せにする力？」

フィーネはキョトンとして祖母の優しいハシバミ色の瞳を見つめる。

「そう、フィーネ、私はあなたがいてくれるだけで幸せなの。そして、あなたがほほえんでくれたらもっと幸せ。その明るい日差しのような笑顔を忘れないで」

フィーネははにかみながらも嬉しそうに頷いた。

この夢からできることなら、さめたくない。

もうすぐさめそうになる夢に、フィーネは手を伸ばして、縋りつこうとした。

第三章 ハウゼン家の縁談

「お父様、今なんておっしゃいました？」

家長ドノバンの執務室で、ミュゲは信じられないというように大きく目を見開いた。

「お前にはシユタイン公爵のもとへ行ってもらいたい」

再びドノバンが繰り返す。

「嫌です！ お父様も王都での彼の評判はご存じでしょう？ 彼の家を訪ねた令嬢が、意識不明で運び出されたり、行方不明になったりと悪い噂が絶えません！」

ミュゲが顔を青ざめさせる。

「いや、それは大袈裟な噂話だ。本当に今回はただの顔合わせだよ。あちらが気に入らなければそれで終わり。お前は帰ってくればいい」

ドノバンはあきれたように、首を振る。

「冗談じゃないわ！ 馬車で片道ひと月もかかるような辺境へ、ただの顔合わせで行くなんて馬鹿げています。地位が高くてお金があっても願い下げですわ。私のお友達も噂していました。恐ろしく醜いお顔をしていて、貧民街から人をさらっては人体実験を繰り返していると。今の富はそれで築いたという話です。お父様は、そんな家へ私を送り込むおつもりですか」

ミュゲが怒りに顔を上気させ、ドノバンに言い募る。

「ミュゲ、少し落ち着いたらどうだ。そんなバカなことがあるわけがないだろう。彼は名誉ある魔導士で、王宮から報奨金をたんまりもらっている。それにお前の言うその噂が本当ならば、彼は捕まっているはずだろう？」

ドノバンは娘の話には取り合わず、なだめるように言う。

「それでも嫌です。なぜ、私があんな辺境領へ行かなければならないのですか？ 私にはほかにも縁談がありますでしょう」

ミュゲは頑として受け付けなかった。彼女はまた王都で遊びたかったし、いくら金があると言っても、醜い男のもとへ行くなど嫌だった。

「投資の失敗で、我が家の財政は傾いてしまつてね。選べる立場ではないのだよ。今ではシユタイン閣下との縁談がいちろ一縷の望みなんだ。気難しい方と聞くが、お前ならばきっと彼に気に入られるはずだ。それに相手は公爵家だぞ」

ドノバンがさもいい話のように言う。

「ご自分の投資の失敗の責任を私に取れと？ この家に娘は三人います。私でなくともよいはずです。なぜ、私が醜い奇人変人魔導士と言われている方のもとへ行かなくてはならないのですか！」

ミュゲはきつぱりとはねつけた。

「しかし、マギーはまだ幼いだろう」

マギーはミュゲの五つ年下だ。

「フィーネがいますでしょう？」

ミュゲが年子の妹の名を出すと、ドノバンが洪面を作り、首を振る。

「あれはだめだ。魔力がないし、今は病に臥せている。それにシユタイン公爵家は代々偉大な魔導士を輩出している家系だ。魔力なしの娘を嫁がせるわけにはいかない」

他にも理由がある。フィーネが寝込むようになってから、執事が突然やめてしまったので、今この家でドノバンの仕事を手伝うことができるのは、彼女しかいなくなってしまった。新しく人を雇えないハウゼン家からフィーネがいなくなるのは、ドノバンとしても少々困る。

彼女は世間知らずだが、ほかの兄妹妹のように立派な家庭教師をつけたわけでもないのに、ローズ譲りで数字や書類に強い。

ここは、そつなく社交をこなすミュゲに行ってもらうのが一番だと考えていた。

「顔合わせだなんて言つて、やつぱり嫁がせるつもりなんじゃない！ それならば、なおさらフィーネを行かせればいいではないですか。だいたい変人閣下は辺境の領に閉じこもっているのでしょ？ それならフィーネを私だと偽つたつてわかりやしないわ」

ミュゲの発言にドノバンは目をむいた。

「何を言っているんだ。お前たちは髪の色も目の色も違うし、嘘がばれたら大変だぞ！ シユタイン家は王族とも縁の深い家系だ。どんなお咎めがあるか」

「ばれっこありませんよ。社交界にも一度もお出にならない変わり者なのですから」

「ミュゲ、公爵閣下は魔導研究が認められ、叙勲されたお方だぞ。言いすぎだ」

ドノバンが窘めると、ミュゲはまなじりを吊り上げた。

「醜く人嫌いな変人魔導士様なのでしょう？ お父様はそんな人のもとに家の犠牲で私を嫁がせるおつもりですか？ 役立たずのフィーネでも、マギーでもなく、この私を！」